

PRESS RELEASE

泉屋博古館東京

SEN-OKU
HAKUKOKAN
MUSEUM TOKYO

企画展 もてなす美 一能と茶のつどい

Thematic Exhibition The Beauty of Hospitality: Gatherings of Noh and Tea



2025年11月22日(土) - 12月21日(日)

《展覧会概要》

住友家歴代の当主たちは、教養として能楽や茶の湯などをたしなむとともに、自ら能や茶の会を主催し、客人をもてなすことでさまざまな交流関係を築いてきました。本展では、そうしたもてなしの場で用いるために集められた、能や茶にまつわるコレクションを紹介します。

能関係の諸道具は、多くが15代当主・住友吉左衛門友純（号・春翠）により集められたもので、そのコレクション形成には、能楽師・大西亮太郎（1866-1931）が大きく寄与しました。コレクションのなかには、春翠が実際に身に着け舞を舞ったと考えられる装束や、7代当主・友輔が演能で使用したと考えられる能面など、歴代当主ゆかりの品も伝わります。

また、大西は春翠の能の師であるばかりでなく、茶の湯の友としての顔も持ち、大正期に春翠が催した茶会にしばしば参加しました。残された茶会記には、その折々に用いられた道具類が記録されており、茶会を主催した春翠の美意識をうかがい知ることが出来ます。

さらに、技法という点からも能装束に着目し、「染織と金属」をテーマとするコーナー展示を行います。

本展ではこれら能楽や茶の湯にまつわる諸道具をとおして、春翠を中心とした住友家におけるもてなしの美を紹介します。

（出品点数 約60点、会期中の展示替えなし）

《基本情報》

展覧会名	もてなす美—能と茶のつどい
会 期	2025年11月22日（土）～12月21日（日）
開館時間	11:00～18:00 ※金曜日は19:00まで開館 ※入館は閉館の30分前まで
休 館 日	月曜日、11月25日（火）※11/24（月・祝休）は開館
入 館 料	一般1,200円(1,000円)、学生600円(500円)、18歳以下無料 ※20名様以上の団体は()内の割引料金 ※障がい者手帳等ご呈示の方はご本人および同伴者1名まで無料
会 場	泉屋博古館東京 〒106-0032 東京都港区六本木1-5-1 https://sen-oku.or.jp/tokyo/ TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル)
主 催	公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社(予定)

《本展のみどころ》

1. 住友コレクションの能装束 久々の公開

泉屋博古館東京では約100点を数える能装束コレクションを有しており、これまでも能をテーマとした企画展を開催してきました。しかしながら、最後に能装束をまとめて展示したのは平成20年（2008）4月に京都の本館で開催された「住友コレクション能の彩一面と装束一」においてのこと。東京館では大倉集古館とともに開催した平成18年（2006）1月の「The 能」以来、ほぼ20年ぶりの公開となります。

能装束というと、唐織や厚板など、華やかな模様が施されたきらびやかな装束が真っ先に思い浮かびますが、住友コレクションの能装束は、単に鑑賞用としてではなく、実際に演能で使用されるために集められたものが多いため、狩衣や長絹など、比較的落ち着いた美しさを見せる装束も数多く含まれています。

実用を念頭に置いた能装束コレクションの在り方にも、ぜひご注目ください。



平成20年（2008）に京都・本館で開催した「能の彩一面と装束一」展のチラシ

2. 住友春翠が最初に手に入れた能面

住友家では明治20年代から大西亮太郎一門による演能が行われており、春翠自身も早くから大西について能を稽古しています。また、住友家では春翠が主催する謡の会などもしばしば催されました。それにともない、春翠は能面や能装束といった、演能に必要な道具類の収集もはじめています。

春翠が最初に手に入れたのは、能の演目のなかでも別格である「翁」で用いられる《白色尉》でした。「翁」は天下太平や五穀豊穡を祈って演じられる神聖な演目です。桃山時代の作とされるこの翁面は、やさしく笑みを浮かべた、とても穏やかな表情を見せています。



白色尉
桃山時代・16世紀
泉屋博古館東京

3. 能楽師であり、茶も嗜んだ大西亮太郎

明治から昭和初期の関西を中心に活躍した能楽師・大西亮太郎は、慶応2年（1866）に大坂に生まれ、祖父の大西寸松や、叔父の大西閑雪らに能の手ほどきを受けました。明治3年（1870）には初舞台を踏み、「大仏供養」の頼朝を演じています。少年時代には上京して二十三世観世清廉や初世梅若実、梅若六郎らにも師事します。大正元年（1912）には神戸に大西能楽堂（後の湊川能楽堂）を、大正8年（1919）には大阪に大阪能楽殿を建て、能楽の発展にも尽力しました。

住友家では12代友親が大西閑雪に謡を習っており、春翠以前から大西家との交流がありました。春翠が明治25年（1892）に住友家に入ってから、明治28年（1895）に「大西の能」が住友家にて上演された記録を皮切りに、その後もしばしば大西亮太郎の一門が能を演じました。さらに大西は謡と仕舞の師として春翠と関わりとともに、春翠が能道具を集める手助けも行っています。大正期に春翠が茶会を主催するようになると、大西は客として茶会に招かれ、茶の湯の友としても交流しました。

また、大西による大阪能楽殿建設の際には、春翠が大阪・天王寺の土地を寄付し、財界の仲間にも声をかけてその後押しをしたと伝えられており、さらに春翠が亡くなった折には能面二面が大西に贈られるなど、親しい交流関係にあったようすがうかがえます。

本展ではこうした大西との交遊関係もあわせて紹介します。



大西亮太郎

《展示構成》（予定）

第Ⅰ章：「住友コレクションの能装束」

住友コレクションには能装束をはじめ、能面や楽器など、能関係の諸道具が多く含まれています。能面・狂言面はあわせて130面以上にのぼり、能装束も約100点を数えます。このうち能装束はいずれも、能を好み、自らも嗜んだ住友家第15代当主・住友春翠によって集められました。その大きな特徴として、唐織や厚板をはじめ、狩衣や法被、長絹、舞衣などの表着、縫箔などの着付、さらに大口や半切といった袴など、演能に必要な装束がそろっているという点が挙げられます。また、実際に使用した痕跡が残るものも多く、これらの装束は単に鑑賞用としてではなく、演能に用いる目的で集められたものであることがわかります。

こうした春翠の能道具収集を助けたのが、観世流の能楽師・大西亮太郎でした。大西は春翠の能の師であり、住友家で催された宴席などでもしばしば能を披露しています。現在住友コレクションに含まれる能装束の約7割が、この大西の助力によるものでした。種類の豊富さというコレクションの特徴も、能楽師である大西の仲介があったからこそなのかもしれません。



白紫段海松貝四菱唐花丸模様厚板 江戸時代・17世紀 泉屋博古館東京



紅白萌黄段青海波笹梅枝垂桜模様唐織 江戸時代・18世紀 泉屋博古館東京



紅白浅葱段松原霞波模様縫箔 江戸時代・18世紀 泉屋博古館東京



白地松青海波模様袷狩衣 江戸時代・18世紀 泉屋博古館東京



紺地唐花立鼓雲菱千切模様半切 江戸時代・19世紀 泉屋博古館東京

第Ⅱ章：「住友家の演能と大西亮太郎ゆかりの能道具」

住友家15代当主の住友春翠は、生家である徳大寺家にいた頃より、晩年とくに能を好んだ父・徳大寺公純（1821-1883）のそばで能に親しましました。住友家ではもともと、招宴の際には歌舞伎が余興として行われていましたが、明治25年（1892）に春翠が住友家に入ってから、能が演じられるようになります。その舞台に立ったのが、大西亮太郎の一門でした。また、大西に師事して能を稽古した春翠は、折々に謡会を催しては、ときおり自ら装束を身に着け仕舞を披露することもありました。《紫地鉄線唐草模様長絹》は、春翠が「杜若」のキリを舞った際に着用した長絹と共通する特徴を示す一領です。

さらに大西は第Ⅰ章で紹介した能装束のほかに、能面や楽器の購入に関しても助力をしています。住友コレクションには小鼓や大鼓、太鼓に笛と、演能に必要な楽器が揃っていますが、春翠が大西を介して購入したものも多く、摩り減りやすい小鼓胴のなかにあって、制作された17世紀頃のオリジナルの姿をとどめる《香包蒔絵小鼓胴》など、貴重な品も含まれます。また、能面の鑑識にも優れていたとされる大西ゆかりの《妙作尉》は、きわめて珍しい造形を見せる面です。



紫地鉄線唐草模様長絹 江戸時代・19世紀
泉屋博古館東京



香包蒔絵小鼓胴 江戸時代・17世紀
泉屋博古館東京



妙作尉 桃山～江戸時代・16～17世紀
泉屋博古館東京

第Ⅲ章：「茶の湯の友—住友春翠と大西亮太郎」

江戸時代に銅の精錬事業で大きく発展した住友家では、供給の一環として茶の湯を取り入れ、自ら茶を立て客人をもてなした当主も多くいました。第15代の住友春翠は幼い頃から茶の湯に親しみ、住友家に入ってから煎茶趣味にも触れています。春翠は明治40年代頃に茶人・中川魚梁について本格的に茶道を学びはじめ、大正期にはしばしば茶会を催し、客人をもてなしました。残された茶会記には、招かれた客人の名前や、茶会で用いられた道具類などが記録されています。そのなかには、春翠の能の師である大西亮太郎の名前も見え、大西が茶の湯の友としても、春翠と交流していたようすがうかがえます。

大西の参加した茶会で使われた道具のなかには、春翠が当館所蔵の《小井戸茶碗 銘 六地藏》に次ぐ名器と評した《小井戸茶碗 銘 筑波山》や、酒井抱一（1761-1828）の下絵をもとに、原羊遊斎（1769-1846）が制作した《椿時絵棗》などが含まれています。なかでも《椿時絵棗》は、付属する添書を寄付の床に掛け、棗本体は最後の薄茶席で披露するという心憎い使われ方がしています。



小井戸茶碗 銘 筑波山
朝鮮時代・16世紀
泉屋博古館東京



原羊遊斎 椿時絵棗
江戸時代・19世紀
泉屋博古館東京

テーマ展示：「染織品と金属」

染と織というふたつの技術から出来上がっている染織品。その染織品と金属との組み合わせは、一見ふしぎなようにも感じられますが、実は染にも織にも金属が使われることがあります。織では金箔を和紙に貼り付けて糸状に切った平金糸を織り込んだ金襴がその代表です。金襴は女性の帯や能装束のほか、茶道具の仕覆や掛軸の表具などによく使われています。一方の染では、繊維に染着しにくい染料を使用する際に、その染着を助ける媒染剤として、金属が用いられます。使われる金属は錫やアルミニウム、銅などがあり、もっとも古くから用いられて来たのが、黒の染色で使われる鉄媒染剤です。

こうした染と織以外にも、染織品には糊を使って金箔などを張り付け模様を表す摺箔や、色とりどりの糸に加え、金箔や平金糸を絹糸に巻き付けた撚金糸を用いた刺繍など、金属が使われた加飾技法がさまざまに駆使されています。



紅地時鳥葉玉模様縫箔
江戸時代・18世紀
泉屋博古館東京



紺地桐卍字散模様袷狩衣
江戸時代・18世紀
泉屋博古館東京

《会期中のイベント》（予定）

※全て当日の観覧券が必要になります

※予約制のイベントは11月7日(金)正午より

WEBサイトにて受付開始予定（先着順）

講演会「住友コレクションの能装束と近代における能装束の移動（仮）」

11月29日(土) 14:00～15:30 講師：長崎巖氏（丸紅ギャラリー 副館長）

定員：50名（予約制）

特別コンサート「能×つなぐ」 12月15日(月) 14:00～15:00

出演：青木涼子氏（能声楽）、上村文乃氏（チェロ）

定員：30名（予約制） 料金：3,500円（税込・入館料別）＊当日は展示もご覧いただけます

〈アートWith〉レクチャー「美術品の撮影－光に現れるかたち」 12月5日(金) 17:30～18:30

講師：田口葉子氏（写真家）定員：50名（予約制）料金：500円（税込・入館料別）

学芸員によるスライドトーク

11月27日（木）・12月13日（土）各 14:00～15:00

講師：田所泰（泉屋博古館東京学芸員） 定員：60名（予約不要・当日11時より整理券配付）

《貸出可能画像・キャプション一覧》

	紅白萌黄段青海波笹梅枝垂桜模様唐織 江戸時代・18世紀 泉屋博古館東京		紫地鉄線唐草模様長絹 江戸時代・19世紀 泉屋博古館東京
	白紫段海松貝四菱唐花丸模様厚板 江戸時代・17世紀 泉屋博古館東京		白色尉 桃山時代・16世紀 泉屋博古館東京
	紅白浅葱段松原霞波模様縫箔 江戸時代18世紀 泉屋博古館東京		妙作尉 桃山～江戸時代・16～17世紀 泉屋博古館東京
	紅地時鳥薬玉模様縫箔 江戸時代・18世紀 泉屋博古館東京		紺地唐花立鼓雲菱千切模様半切 江戸時代・19世紀 泉屋博古館東京
	白地松青海波模様袷狩衣 江戸時代・18世紀 泉屋博古館東京		小井戸茶碗 銘 筑波山 朝鮮時代・16世紀 泉屋博古館東京
	紺地桐卍字散模様袷狩衣 江戸時代・18世紀 泉屋博古館東京		原羊遊斎 椿蔦絵甌 江戸時代・19世紀 泉屋博古館東京

《お問い合わせ先》

泉屋博古館東京 広報担当：橋本旦子 展覧会担当：田所泰(泉屋博古館東京 学芸員)

TEL: 03-3584-8136 FAX: 03-3584-8137 E-mail : pr-tokyo@sen-oku.or.jp



泉屋博古館東京

SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM TOKYO